

2020年7月11日

戦略謀略放送の立役者—^{つねいししげつぐ}恒石重嗣参謀

報告：名倉有一
E-mail: nagura95@gmail.com

目次

はじめに

恒石重嗣と著書『心理作戦の回想』
主な参考文献

1. 戦前

- 1.1 生い立ち
- 1.2 高知城東中学校（高知一中）
- 1.3 陸軍士官学校
- 1.4 陸軍大学校

2. 戦時中

- 2.1 参謀本部第8課
- 2.2 電波の利用
- 2.3 海外放送局との連携
- 2.4 海外放送要員の強化（捕虜、二世の活用）
- 2.5 「ゼロ・アワー」
- 2.6 「日の丸アワー」
- 2.7 終戦まで

3. 戦後

- 3.1 米国の追及：日本人
- 3.2 " ：捕虜・二世
- 3.3 職業
- 3.4 趣味
- 3.5 公的活動・逝去

はじめに



つねいししげつぐ
恒石重嗣 明治四十二年十月十九日生
陸士第四十四期 昭和十五年陸大卒 元陸軍中佐 同年
在満第十二師団参謀 昭和十六年十一月より同二十年六
月まで参謀本部部員大本営陸軍参謀(宣伝主任)兼報道部
部員 陸軍中野学校教官・軍務局課員 同年七月より終
戦まで第五十五軍参謀兼四国軍管区参謀 戦后米国司法
省証人として渡米三回 会社役員、高知県郷友連盟副会
長 (現住所)高知市中秦泉寺三二一



- ・ 生没年：1909-96
- ・ 事績：南太平洋の米軍に向けた謀略放送「ゼロ・アワー」で狙いどおり米軍聴取者をつかんだが、戦後 GHQ の追及や「東京ローズ」裁判に翻弄された。
- ・ 印象：ケレン味のない、合理的主義者。

【ビデオ編 p.2】

[主な参考文献]

㉑ 恒石重嗣『心理作戦の回想』東宣出版、1978年

(戦前)

㉒ 恒石重嗣「君を追想して」『河村俊平追想録』私家版、1937年

㉓ 〃 「畏友 山下君」『聚光 山下豊追想集』〃、1990年

㉔ 山崎正男編『陸軍士官学校』秋元書房、1969年

㉕ 山本武利『陸軍中野学校』筑摩書房、2017年

(戦時中)

㉖ 『戦前の情報機構要覧』国立国会図書館デジタルコレクション、1964年

㉗ 有山輝雄、西山武典編『情報局関係資料第4巻』柏書房、2000年

㉘ 海外放送研究グループ『NHK 戦時海外放送』原書房、1982年

㉙ 並河亮『もうひとつの太平洋戦争』PHP研究所、1984年

㉚ 北山節郎『ラジオ・トウキョウ2』田畑書店、1988年

㉛ 鳥居英晴『国策通信社『同盟』の興亡』共栄書房、2014年

㉜ 「昭和十八年度参謀長合同における実務連絡事項（第八課主務事項）」アジア歴史資料センター Ref.C14010442700

㉝ キヤプベル・スチュアート、飯野紀元訳『英国の宣伝秘密本部 クルーハウスの活動』内外書房、1943年

㉞ 西村伊作『我に益あり』紀元社、1960年

㉟ 池田徳眞『日の丸アワー』中央公論社、1979年

㊱ 〃、名倉有一・和子訳『駿河台分室物語』、私家版、2015年

(原本『*Bunka Camp Story*』私家版、1964年)

㊲ 名倉有一編『駿河台分室物語【資料編】』私家版、2015年

㊳ 多川精一『戦争のグラフィズム』平凡社、2000年

㊴ 防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書32：シタン・明号作戦』朝雲新聞社、1969年

㊵ 茶園義男編『本土決戦 日本内地防衛軍』不二出版社、1986年

(戦後)

㊶ 恒石重嗣「東京ローズ」始末記『論争』1962年10月号

㊷ 読売新聞社編『昭和史の天皇 3』読売新聞社、1980年

㊸ ドウス昌代『東京ローズ』サイマル出版会、1977年

㊹ 上坂冬子『特赦：東京ローズの虚像と実像』文芸春秋、1978年

1. 戦前

1.1 生い立ち

- ・生家：高知市東方の香美郡香我美町西川（現在の香南市）。山間部。大きな石垣（恒石の姉の孫、安岡元彦氏の話。恒石を「^{おおおじ}大叔父」と呼ぶ。1955年生まれ）
- ・恒石は末っ子で年の離れた兄と姉がいた（**(B)**163）

1.2 高知城東中学校（高知一中）：1927年3月、卒業。同級生に漫画家の横山隆一

1.3 陸軍士官学校

- ・第44期・・・競争率27倍（44期・浦茂『人生遍路八十年』協和協会出版部、1990、巻末年譜）
- ・当時、予科（2年）+原隊勤務（6カ月）+本科（1年9カ月）=4年3カ月
- ・1年の遅れ・・・在学中健康を害した？
- ・恒石は中学校から入学⇔広島陸軍幼年学校の高知出身者7名（**(C)**34）
- ・五・一五事件：32年、戦跡を訪ねる満鮮旅行から帰国した翌日
 - ・・・参加した11名の士官候補生が退校処分（**(D)**52）。44期で優等卒業目前の吉原正巳は禁固4年、3年間の兵役後陸軍中野学校で国体学教官（**(E)**112, **(C)**73）
- ・同年7月卒業（歩兵科）・・・卒業生315名。首席原四郎（Wikipediaに単独項目なし）、次席瀬島龍三
- ・香川県丸亀第12連隊で見習士官
- ・同年10月25日、陸軍歩兵少尉に任官
- ・37年、北満（今の黒竜江省）孫呉の独立守備隊へ1年弱・・・安達^{はたぞう}二十三連隊長の陸大受験のための便宜供与か。同隊に陸軍きつての文化軍人町田敬二中佐

1.4 陸軍大学校：38年6月～40年6月（53期）

- ・在学中、ノモンハン事件（39年5月）、第二次大戦（同年9月）
- ・卒業後ソ連との東部国境に近い東寧に駐屯する第12師団参謀
- ・41年7月の関東軍特別（特種）演習では、「後方主任参謀」（兵站）
- ・少佐に進級。（おそらく陸士同期の瀬島と同じ同年10月）
- ・同年11月10日、参謀本部付転任の電令
- ・同月18日、空路帰国し三宅坂の参謀本部へ・・・この日海軍機動部隊主力は演習地の九州佐伯湾からハワイ空襲の途に

2. 戦時中

2.1 参謀本部第8課

- ・ 1941年12月15日、市ヶ谷の元陸軍士官学校庁舎に移転
- ・ 参謀本部組織図
- ・ 第2部組織図
- ・ 開戦時の日本の宣伝体制：3本建て（大本営陸軍部・海軍部、情報局）
- ・ 恒石の批判【ビデオ編 p.4】
 - ① 「情報の大本営」情報局・・・「寄合所帯で弱体だった」
 - ② 陸軍報道部・・・「海外向けの宣伝はしていない」
- ・ 「大戦に伴う宣伝計画」立案・・・開戦直前
 - ① 陸軍案を作成して上司の決裁を受けたうえで情報局に示す
 - ② 情報局はこれを基に「日英米戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱」発表（㊦）

2.2 電波の利用

- ・ 42年1月15日、大本営発表の一元化（それまでは、「陸軍部」と「海軍部」が別）
- ・ 米国関連
 - ① 同年2月11日発足の「太平洋戦時救済委員会」（謀略）に関与（㊧3-4）
 - ② 同年2月ころ、国際電気通信に開発依頼した米国内の中波放送傍受機器完成
→第8課別班：約200名の二世が日夜3交代で受信、外務省ほかへ配布
【ビデオ編 p.5, 6】

2.3 海外放送局との連携：頻繁に海外出張

2.4 海外放送要員の強化

- ・ 42年2月ころから情報局が日本放送協会（以下NHK）から捕虜を使った海外放送開始：「家族へのメッセージに限定。政治的な発言は一切認めない」（㊨185）
- ・ 前メキシコ駐在武官・西義章大佐が日米交換船で帰国、第8課課長・・・NHK批判：「東京放送（ラジオ・トウキョウ）は硬直してる」【ビデオ編 p.7】
- ・ 改善のためオーストラリアの元人気アナウンサー、カズンス少佐を日本に護送、「8月初めの暑い朝」会う。彼に米人2名を加えた捕虜3名をNHK指導に送り込む
- ・ 捕虜利用：同年6月3日付俘虜管理部長通牒・・・将校も自発的なら労務は可
※時系列でみると、①5月26日、「海外宣伝に使用するため」カズンスを日本に護送せよとの陸軍次官電、②6月3日、俘虜管理部長通牒、③8月初め、カズンス参謀本部出頭、④8月20日、西大佐横浜港着

2.5 「ゼロ・アワー」

- ・1943年初め、情報局了解の上、NHKに対し「太平洋方面敵軍隊向謀略放送を実施するため、二世を主体とし前記捕虜三名を含めて特別の専任グループを編成するよう要請」→3月、NHKは米州部の10数名で「前線班」編成、番組開始
- ・恒石の危惧：「無数の電波の中に割り込んでいくのは容易ではない」【ビデオ編 p.8】
- ・43年6月29日のニューヨーク・タイムズ紙ガダルカナル特派員：「GIたちはこの放送を大いに気にしている」→「...世界的水準の垢の抜けた放送であると評価されていて、敵将兵の心をつかむ魅力を持っていた。」
- ・成功要因：①気の利いたアドリブ、②戦前のレコード音楽、③米国のローカルニュース。「東京ローズ」とされた戸栗いく子が放送に加わるのは43年11月）
【ビデオ編 p.8】

2.6 「日の丸アワー」

- ・「ゼロ・アワー」の成功を受け、43年夏ころから米国民への呼びかけを準備【ビデオ編 p.9】
- ・同時に、この放送に使う捕虜を収容し、伝單制作の淡路町事務所や九段事務所などを集約した「対敵謀略宣伝センター」（㊦21）開設を準備：①43年8月17日の参謀長会議で、第一次大戦での英国クルーハウスの成功例を詳説（㊧17-34）、②43年8月31日に閉鎖された東京駿河台の文化学院施設を借上げるため、創立者西村伊作の弁護士とともに同氏がいる巣鴨拘置所を訪れ交渉（㊨380）
- ・同年11月3日、参謀本部駿河台分室（「駿河台技術研究所」）開設（㊩28）
- ・同年12月2日、放送開始。主任は池田徳眞^{のりぎね}。池田は外務省情報部ラジオ室で海外の短波放送を聴く中で日本の遅れを痛感、同年5月ころラジオ室長で親友の樺山資英^{すけひで}に「対敵宣伝放送の原理」を見せたのがきっかけ（㊪14-15）

2.7 終戦まで（ビデオ編 p.10,11）

- ・43年10月15日、第8課廃止第4班となる（防衛研究所回答. 2020-04-13）
- ・44年1月15日、本土空襲に備えグラビア雑誌を作っていた東方社の移転先候補として社員とともに主婦の友社を訪れる。最終的に九段坂下の野々宮写真館（㊫218）
- ・同年4月、同盟国駐在武官を招いた遠乗会で幹事（浜本純一『青雲白雲』116）
- ・同年6月、放送でルーズベルト大統領に影響を与える研究を池田に指示（㊬226）
- ・同年11月3日、風船爆弾の米本土攻撃開始に伴い、外務省発行の「短波ニュース」に米西海岸の山火事のニュースが出ないか注意するよう池田に指示（㊭183-184）
- ・45年1月26日、仏印処理に対する現地軍意見聴取のため現地出張（㊮586）
- ・同年3月1日、中佐に進級（瀬島龍三と同時）
- ・同年6月初め、参謀本部第4班と陸軍省軍務局合併により軍務局課員兼職
- ・同年6月22日、四国防衛第55軍兵站担当参謀。7月初め着任（㊯295）

3. 戦後

3.1 米国の追及：日本人

①再び東京勤務

- ・1945年9月20日、米第八軍防諜隊グイシー中尉が参謀本部訪問・・・謀略放送に従事させられた捕虜の、「放送協力を拒んだ捕虜2名が処刑された」という戦後証言の確認。（「脅迫され、やむを得ず日本の放送に協力した」との主張裏付け）
- ・同月23日、同中尉がMPを伴い駿河台分室を訪問
- ・同月、宣伝関係の米軍尋問対応のため、陸軍省軍務局転補発令（『陸軍将官便覧』）
- ・10月3日着任、グイシー中尉の尋問に答え、赤坂の料亭で一席を設けた
- ・毎日のようにGHQに出頭して関係者の尋問に答え、11月中旬ころ四国防衛軍に復帰。進駐軍に対する武器弾薬等の引渡し業務の後、12月1日を以て復員

②高知からGHQへ出頭：45年12月から2年間に23回

- ・「東京ローズや捕虜放送についての調査」と記しているが、恒石自身の戦犯容疑だったと推測する

3.2 米国の追及：捕虜・二世

- ・証人として3回訪米

被告	裁判地	放送	渡航期間
カズンス	オーストラリア	ゼロ・アワー	証言・出廷要請なし
アイバ・戸栗	米国（サンフランシスコ）	〃	① 48年9月～10月 ② 49年6月～8月 ③ 〃 9月
プロボー	〃（ニューヨーク）	日の丸アワー	〃 10月（証言なし）

・恒石への批判：二世・村山有^{たもつ}「...彼が軍人らしい態度で『自分の命令であるからアイヴァ戸栗に罪なし』と堂々と云えば此の事件は成立しなかった。」（村山有「東京ローズは三人居た!」『文芸春秋』1952年5月号. p.72）←恒石の反論：「...彼女は民間人であるから、徴用でもして軍の囑託にでもしない限り命令は出来ない。ましてかかる放送は強制によってうまく行われるものではない。」（㊦140）

・恒石への同情：情報局・並河亮情報官（戦時中NHKから出向）「もしNHKの日本人による英語班が充実と優秀の域に達していたら、参謀本部は捕虜を使おうとは考えなかったであろうし、問題はなかった。」（㊦299）

3.3 職業

①喫茶店「田園」開業：高知市京町 28（現在の「はりまや町 1-1-22」）

- ・49年1月：代表者・恒石喜美（妻）（最高裁判所刑事判例集第10巻3号340頁）
・・・店内で贈収賄が行われた
- ・『高知市商工名鑑 1951』：代表者・恒石重嗣
- ・『 〃 〃 1957』： 〃 ・ 〃
- ・『 〃 〃 1964』： 〃 ・ 永野宣親

②貸店舗：「...売上げはかなり順調だったらしく、（恒石）氏はやがて喫茶店をたたんで貸店舗を建て、現在はその家賃で悠々自適の生活とお見受けした。」（77年㊄88）

③会社役員（78年『心理作戦の回想』プロフィール）

④貸しビル業（朝日新聞、1995年8月11日夕刊「謀略担った「捕虜放送局」」）

※なお54年ころ、恒石は藤原岩市（参謀本部第8課で恒石の前任者）と同様自衛隊へ奉職しようとしたが、「東京ローズ」裁判での恒石の証言に不満な二世の反対で実現しなかったという。（P290）

3.4 趣味

- ・犬の飼育：63年、65年警察犬チャンピオン・・・趣味と防犯
- ・飼育に適した場所へ引っ越し：高知市西秦泉寺→68年、中秦泉寺 321

3.5 公的活動・逝去

- ・77年、「東京ローズ」の特赦を喜ぶ談話（高知新聞、77年1月21日朝刊）
- ・78年、『心理作戦の回想』を自費出版
- ・88年現在の名刺役職：高知県軍恩連盟会長、高知県偕行会会長ほか
- ・96年9月19日逝去（高知新聞、96年9月21日）
- ・2004年2月、妻喜美逝去。11月16日、村山賀代（喜美の妹）が高知市役所を訪れ、恒石夫妻の遺志として高齢者福祉のため1千万円を寄付（高知新聞、2004年11月17日朝刊）

以上